

丸山真男と国民の心象地理*

姜 尚中**

I はじめに—なぜ丸山真男か—

今日は、僕は空間論というよりは、丸山真男という人について少しお話をして、それが少し空間という問題と若干関わるかと思いますが、それに関し皆さんに2点ほど材料を提供できればと思っています。

ひとつは空間についてそれぞれの論者というか、発話をする主体が、何かそれぞれかなり違った意味、あるいは方法的な概念としての空間であるのか、もっとメタレベルの内実にあるのか、色々まあ、すれ違いや同一性があつたと思うんですけども。それからもうひとつは、ヴァナキュラーという問題がありますが、あるいはローカルと言っていいと思うんですが、それをいわばグローバル化の中で、あるいはそのリアリティの中でどういうふうなベクトルとして評価していったらいいのか、そういうようないろんな問題があると思います。その点では、私の話しも少し、まあ、空間の問題と関係してくるかな、と。

最近はどこらかというと明治期の特に日本の草創期の対中国や朝鮮に関する言説、あるいはメディアというのはどういうふうに編成されてきたのかという。それからもうひとつは、30年代の総力戦期における、これは在日の人達が出していた御用新聞なんです、そういうことを今は、まあ、分析している訳ですね。そういう点では、丸山真男という人は私にとっては非常にサイド・ワークというか、丸山さんには申し訳ないんですが、しかしずっと気になる人で、それを少し今年中にまとめてみようということ、そのひとつ

の、3つのうちのひとつにあたるものを、今日皆さんにちょっと話しをしてみたい。それはまだ熟成されたものではなくて、かなり生煮えの状態ですので、非常に矛盾や齟齬が多くて、お前一体何を言いたいんだ、っていうことがおそらく皆さんの方から提起されるんじゃないかと思いますが。

ただ私は、丸山真男という人が亡くなって僅かに時間しか経っていないのに、司馬遼太郎という、いわゆる国民的な作家と言っていい人とならび賞される、しかもその同じ時代にちょうど亡くなったという何か因縁もあって、この2人には私自身はかなり非常に注目をしてるんですが。まあ、丸山真男を通じてこの20世紀の日本を読み直すなんていう副題をたててみたんですね。つまり、空間という問題が中心になってますが、やはりもうひとつよくセットに言われるのが時間という問題、あるいは歴史性という問題だと思うんですね。むしろ、空間と時間、もしくは歴史というものがどう関わるのか、しかもそれを日本というひとつの場で、あるいは日本というカテゴリー自体が本当にア prioriに自明であるのかどうか、そういう問題もひっくるめて非常に大風呂敷、広げるようですけども、20世紀の日本を読み直してみよう、そういう意図があつてこの丸山真男という人を挙げてみた訳です。

一応、私の今日の話しの前に、全体の構図を言いますと、ひとつは『歴史学研究』(「丸山真男における<国家理性>の問題」(701号), 1997年)に発表したものを少し大きく手直しをして、国家理性とネイション、国民の制作、ポイエーシスと言ってもいいですね、それについて少し考えて見よう。後でこの国家理性ということについてお話しをしますが、それから2番目は、今日お話しするような、国民の心象地理というか、それで一応地理、空間と関わると思うんですが、それから

* この原稿は、1998年6月20日に九州大学で行われた「空間」プロジェクト第1回シンポジウム「風景論と空間論の現在」で発表したものを文章化したものである。テープ起こしは穴吹琢磨氏(早稲田大学・院)が行なった。

** 東京大学

第3番目には、20世紀の戦争と政治について考えてみたい。具体的には、丸山真男という人と、20世紀最大の社会学者であったヴェーバーという人をひとつ考えてみたい。4番目には、国民と知識人ということで、丸山真男の先生であった南原繁という人と丸山真男をひとつ取り上げてみる。この全体の4つの編成で、20世紀の終わりと戦後の終焉の中で、一体日本の歴史というものをどう見直したらいいか、ということのひとつ考えたいというのが、私の全体的な意図なんです。

II 丸山と明治という国家

で、それで、今日の発表がそのひとつのパートにあたる訳ですけども、私がここで何を言いたいということ、それは、あくまでも空間の問題として関わらせていると、なぜ丸山真男という人が問題になるかということがこれは私自身にとっては自明なんです、皆さんにとっては必ずしもそうではない。丸山さんという人は、実は、戦時期から自分が亡くなる直前まで一貫してたくさんの福沢論を書いている訳です。私自身は、福沢論吉と丸山真男でいたい戦前と戦後のある日本の、少なくとも典型的なひとつの知的言説というものが一応シンボライズされるんじゃないかというふうに私自身は考えていましたんで、そういう点で戦前戦後を買って日本のモダニティというものを、この2人によってひとつの問題性として明らかにすることが出来るんじゃないかと。

この丸山という人がある福沢論の中で、ある時代はある社会は、その時代と社会に典型的な学問というものを持っている、その学問というのは戦前でいえばこれは福沢論吉である、というように彼は言っている訳ですけども。私自身は、戦後という言説空間の中である時代のひとつの学問というか、これはまあかなりアカデミシヤ的なカテゴリーですが、それはおそらくひとつの代表としてこの丸山真男という人にひとつシンボライズされるんじゃないだろうか。そういう意図があって、彼をひとつ取り上げてみた。

その時に、これはまあ、こちらに来る前に、ある新聞社に頼まれて『プライド』という映画を観てみたんです。その映画を観ながら、歴史というものと国民という問題にやはりどうしても突き当たるわけです。な

ぜそういうことが今、問題になるのか。つまり国民というあるひとつのまとまりを持ったある集団、あるいは国民というものが成り立っているある地理的なひとつの表象なり、あるいはそれを支えている国土と言われているもの、あるいはそこに刷り込んでいる歴史、あるいはその歴史を語る場合のナラティブというか。そういうことがこの20世紀のドン詰まりの中で、しかも戦後が終わりの時代というものを明確に欲している時代の中で、あのような映画が作られ、そして、国民の歴史と物語を巡って様々な社会科学や思想や哲学のレベルで、色々な論争がやられている訳です。そういう問題を考えていくときに、この丸山真男という人は非常にやはり問題を解いていくための大きな手がかりを、私自身にとっては与えてくれているわけです。

と同時に、もう1人、その問題を考えていくときに読み解かなきゃならない人として司馬遼太郎という人がいるわけですけども。戦前は言うまでもなく、戦前戦後も入れて、これだけの膨大ないわば大衆文学というものが天文学的な数字として人々に読まれ、愛好化され、しかも、今日においてはNHKのような映像メディアを通じて依然として根強い人気を誇っている。丸山という人とこの司馬遼太郎という人は、いわゆるそういう意味でも非常にシンボリックな意味を持つるんじゃないかなと思います。

実は、この2人をひとつ手がかりにして、考えたいという意図があったんですけども、あくまでも司馬さんは今日の話しの中では刺身のツマとして、主に丸山さんを中心に考えていきたいと思います。その場合に私自身の仮説は、少なくとも戦前と戦後、つまり1945年8月15日でおつた切んならば、丸山さんのひとつの発想の中に明らかに歴史から空間へという移行が思考過程の中に見られるのではないかと。なぜそう言ったのかということ、またそれを通じて何が語られているのか、ということをし今日お話ししたいんです。

その場合に、今、司馬遼太郎の話をしました。この2人に共通していることは、戦後の日本というもののひとつの中核というものをやはり明治というものに求めているわけですね。というよりは正確に言うとならば、戦後の日本というものは明治、しかもこの2人にとって明治の時代というんじゃないかと、あくまでも明治の国家、いみじくもこの2人は「明治国家の思想」(歴史

学研究会『日本社会の史的究明』、岩波書店、1949年）、これは丸山さんの1949年の論文、それから司馬さんも最近『「昭和」という国家』（日本放送協会、1998年）をNHKから遺稿集として出していますが、その前には『「明治」という国家』（日本放送協会、1989年）、これはベストセラーになっていて、今でも何十刷りになっているわけで、私たちが逆立ちしても到底その販売力は比肩できないほどの。なぜこの2人は国家、それも明治という国家にこだわったのか。そして、2人にまたもう一方において共通していることは、丸山真男のベストセラーになっている未来社から最初に出た『現代政治の思想と行動』（未来社、1956,57年）、その中には昭和のファシズム期および昭和という時代についての丸山真男の政治学的な分析が非常にラディカルかつブリリアントに展開されているわけです。司馬遼太郎の『「昭和」という国家』について、エッセイ集を出しているわけですね。

この2人にとって実は、昭和という時代は、少なくとも戦時期1930年代から40年代初頭に限られていると思うんですが、非常にアブノーマルな、あるいは近代日本というよりは日本のモダニティにとって全く逸脱した時代であったわけです。ご承知の通り丸山さんは、一兵卒としてピョンヤン／平壤、それから広島県の牛田で被爆をするような結果になるわけですし、司馬遼太郎もまた一兵卒としてノモンハンで戦車隊の歩兵として出ている。そういう10歳ほど年齢が違うんですけども、戦争体験を持っているわけですね。この明治という時代と昭和という時代の持っているある光と影、そしてもうひとつの半分の昭和である戦後というのは光である明治にもう1回復帰する、つまり明治ルネッサンスとして戦後の昭和というのは彼らにとって印象深く考えられているわけです。この点において2人は、かなり私には共通しているし、その共通しているこの2人は、ただ単に1人の帝国大学の内部にいた知識人とポピュラーな国民的な作家という違いを超えて、実は国民的な合意になっているんじゃないかという気がするんです。つまり、ナショナル・ナラティブとして大体それが定着しているんじゃないかと。

なぜそうなんだろうかということを考えていくときに、私たちは当然言うまでもなく玉音放送があって8月15日の革命説があって、そして戦後日本といういわゆる戦後と断絶したある時代と空間というものが20

年以上経過してきたと。そういうようなひとつのナラティブを私たちは大体共通して受け入れているわけです。しかし、これは私にとってはかなり違和感のあるひとつのフィクションではないだろうか。

ご存知の通り丸山という人はある論文の中に、大日本帝国の逸材に賭けるよりは、戦後民主主義の虚妄に賭ける、というふうに彼は言いましたが、しかし、8月15日革命説、そしてそれは言うまでもなく1946年元旦の昭和天皇の人間宣言から始まっていくわけです。それは言うまでもなく五カ条の御誓文から始まっていく。これを通じて一応、いわば昭和ファシズムのファナティズム、それを動かしていた軍閥や内務省等々の人々が切り落とされていく、そしてマッカーサーの発言があって、そして新しい憲法へと向かっていくわけですね。その結果として一応戦後の日本というものの言説空間の中では戦後の民主主義というものは、いわば明治というもののルネッサンスとして理解されてきましたし、事実上、昭和天皇の人間宣言はそれをマニフェストしているわけです。そういう語りの中で初めて丸山真男という人も、例の最も有名な『世界』に発表された「超国家主義の論理と心理」（『世界』5、1946年）を発表して、いわば戦後日本の言説空間の中で圧倒的な影響力を持ったかたちでデビューしていく。

今日は時間がないのであまり詳しく述べられませんが、実は8月15日からマッカーサーの発言が出るまでは、彼らは事実上、大日本帝国憲法をそのまま、部分的に修正すれば戦後は乗り切っていけるというふうに彼らは事実上考えておりました。というよりは、私が見る限りでは、丸山さんは美濃部達吉の天皇機関説をそのまま踏襲するかたちで、つまり天皇体系にはそのまま修正を加えずに、いわば戦後というものが出発できるんじゃないか、というように彼は考えていました。後に丸山さんは昭和天皇が亡くなった後のひとつの回想録の中で、自分が敗戦を迎えたときには、事実上、私自身は天皇の重臣リベラルであった、というふうに書いているんです。そういう点において、いわば戦後日本の最もリベラルでかつラディカルな知識人であった人物が、本来においては少なくとも占領軍を通じて大日本帝国憲法の部分修正ではなくして、いわば国民主権と平和主義と、そしていわば民主主義という3つの原理が明確に外在的かつ他律的に、いわば天皇の上にある超憲法的な勢力によって叩き込まれる

ことを通じて、やっとコペルニクス的な展開というものを通じていくわけです。

私の出発点は、なぜそうだったのか。つまり8月15日革命説というのは実は昭和天皇の人間宣言があり、マッカーサーの発言があり、そして日本国憲法へと向かっていく一連の動きの中で初めて事後的に出てきたんではないだろうか。つまり、戦後の日本というのは残念ながらというか、当然というか、つまり大日本帝国憲法の上に立っているシュミット的な言い方を使えばいわば憲法制定権力の上に立っている権力と、そして大日本帝国憲法を動かしていた人達の合作の結果として一応の転換を遂げたというのが、そしてその一応の転換を遂げた軌道の中で初めて丸山真男という人が戦後日本を代表するリーディングな知識人あるいは言論人として出てくる、ということなんではないかというふうに私自身は付度したわけですね。

Ⅲ 戦時期の個と国民

そう考えていくと、戦時期において彼らは一体どういう言説を語っていたのか、そういうふうにはひとつ関心が向いていったわけです。実は丸山さんは既に1930年代に東京帝国大学法学部の緑会論文「政治学に於ける国家の概念」(『東京帝国大学緑会雑誌』8, 1936年)の中で非常に面白い論文を書いているわけです。そのひとつの彼の主張は、最終的には、ファシズムというのは要するにヨーロッパ的な市民社会が生み出した鬼っ子である、したがって日本の軍国主義に対抗していくためにはヨーロッパ的な市民社会では駄目なんだ、むしろ市民社会というものの本質が、国家の形態というのは権力国家であって、それは結局、危機の時代においてはファシズム国家として化けて出るんだというような発想なんですね。で、そうではない日本の新しい国家のレジームを作らなければならない、彼の言葉を使うと、新しい弁証法的な全体性という言い方を彼はそこで述べているわけです。

それは具体的に一体何を意味しているかという、これはおそらく私の考えでは、丸山さんは1940年、つまりパール・ハーバーがある1年前、そして日中戦争があってもなくして、彼は例の近衛新体制にある夢を賭けるわけですね。言うまでもなく、この近衛新体制運動の中には知識人としてはその当時の法学部の

教授であった人物とか、あるいは三木清とか尾崎秀実とか、こういう人々がそこに参入しているわけですが、丸山さんはあるエッセイの中でこの新体制運動にあるひとつの望みを賭けようとするわけですね。

それはどういうことかという、彼の発想の中に、この戦時期の総力戦体制を戦うためにはヴァナキュラーなものを一切根絶しなければいけない、もっと言うと、このいわゆるカンパリスモというか、ようするにパトリオットの共闘主義というのでしょうか、つまりローカルなある中間的諸団体やその中間的諸団体に帰属している意識、あるいは第1次的な共同体意識、あるいはもっと単純化すればゲマインシャフト的な意識、こういうものがある限り、実は個人と国家とがいわば弁証法的な全体性をなすような新しい総力戦国家というものはつくり得ない。

これはおそらく私は、彼の後の戦時体験にもおそらく大きな影を落としていたというふうには。それはどういうことかと言うと、ようするに日本という国のナショナリズムは、このヨーロッパ的な意味で、戦時体制をもつくり得ない、戦時体制を内側からサボタージュするような、かなりローカルで、あるいはヴァナキュラーな意識や利害関心によって、常に総力戦体制というものが全体として作動しないという、そういう危機意識というものがあつたんだと思うんですね。それはファシズム期における全体性国家とは違う意味での、もっと近代的な意味での国民国家を形成しなければいけない。そのことを彼は「福沢諭吉」(『世界歴史事典 第16巻』平凡社, 1953年)の中ではっきりと、一身独立して一国独立する、と。あるいは、一身の自由な主体性と国家の持っている全体性がいわば矛盾無く弁証法的なある全体性を形づくる、そういうビジョンというものを形成する、というんですね。

もっと例えていうと、彼の頭の中には日本の近代国家のアポリアというのは、ようするに、個人の意識とそしてネーションとしての意識というのが乖離し、そしてこの個人と国民という個と全体性というものが常に乖離しながら、主観の、あるいは丸山さんの言葉を使うと、主観的な内面性の解放と実は国家主義的なものがコインの表と裏のような関係になっている、そういう近代化。こういう近代的な社会においては常にナショナリズムというものは異物な形態を取らざるを得ない。で、それをどうやって克服していくのか、と

ということが彼の主要な関心事だったわけですね。

そういう意味においては戦時期はむしろ彼にとっては絶好とない機会であって、この総力戦体制をつくるという、これをテコにして、実は今申し上げたような日本の明治期以来の国家主義を実は支えていたあるヴァナキュラーな意識なり、あるいは第1次的な共闘意識とか、あるいはイエ意識とか、あるいはローカルな分散的な利害関心とか、そういうものを粉砕していくような、そういう画期的な時代として彼らはこの30年代から40年代初頭を考えたんだと思うんです。そのひとつが彼の中に、近衛新体制への共感とかたちで現れたんだと。

で、そういう意図で彼が書いた『日本政治思想史研究』（東京大学出版会、1952年）を読むと大体よく分かってくるわけですし、『日本政治思想史研究』というかなり難しい3つの論文の中で彼が一貫して言おうとしているのはそういうことなんです。それを江戸期にまでさかのぼって荻生徂徠からずっと考えていく。つまり日本における個の意識とそしてそれがいわば対外的なインパクトを通じて我々としてのネイションというものへと有機的につながっていく回路、それをどうやって日本の中に自生的に発見できるのか。それは言うまでもなく、そこに挙げたようないくつもの思想家達の言説を借りながら『日本政治思想史研究』の中で見事に展開されているわけですし、そして彼は一方においてはそこに述べたような福沢論を書いているわけですね。彼自身は戦後、かなり否定してるんですが、私自身から見ると、その当時の昭和研究会に参入した三木清とか尾崎秀実らの持っている日本とあるいは中国との関係についての言説とかなりオーバーラップするところがあるわけです。

つまり、30年代から40年代初頭の日本の国家が抱えていた最大の問題は、いわゆる支那問題でした。言うまでもなく、東亜新秩序というものをどうやって形成するかということが最大の問題になってきたときに、彼は、というよりは丸山さんのおそらく考え方の中では、この日本がいち早く東アジアにおいて、今申し上げたような総力戦体制を通じてより近代的な国民意識というものを形成する。それは文化的な意味での国民主義ではなくして、政治的な決断を通じて形成される国民、つまり戦後私達が文化的な意味でのナショナリズムとして日本人論や日本文化論を知っているわけ

すけれども、そうではなくして、文化ではなくして政治的な決断を通じてある国民というものを形成していく。彼の言葉を使えば、国民とは国民たろうとするものである、というひとつの大きな決断を通じた国民の形成、つまり意志という問題があるんですね。国民の意思というものを、いわばデモクラシーを通じて形成していく、あるいは創造していく。そういうかたちでの総力戦期の国民、そういうものをつくり出した日本が同時にいわば中国におけるナショナリズムというものをサポートし、そして中国と日本との相互の近代的な国民意識を通じた連携というものを謀っていく。その中で初めて東亜の新秩序というものが形成されるのではないだろうか、

これは全く三木が考えたこととほぼ同じなわけですね。三木清が1940年前後にいるんなところでエッセイで考えていることは、今日私達が知っているいわゆる日本人論や、あるいはローカルなパトリオティズムによって支えられている日本人という意識ではなくて、明らかにこれは政治的な意味での国民意識としての日本ですね。そういうことを絶えず彼は述べているわけです。そうでなければ、文化やあるいはローカルな様々なバックグラウンドが違う支那と日本とが東亜において連携できる可能性は全然無いはずだ。つまり、中国と日本とが連携できる道というのは、これは文化的な共同性ではなくして、政治的な共同性というんでしょうか、そういうような発想で彼は30年代から40年代の危機というものを、そういうところにフォーカスしながら乗り越えていこうとしたんだということですね。それが大体戦時期における丸山さんの基本的な思想史研究なんです。僕自身の解釈ではですね。

ところが戦後になりますと、実はそれがかなり変わってきます。なぜそれが変わってきたかということをお話しながら空間の問題に入っていきたいんですが、実は皆さんもご承知の通り、経済地理学とか人文地理学で最も著名な飯塚浩二の平凡社の著作集の第5巻の解説（『飯塚浩二著作集 第5巻』、平凡社、1976年）を丸山さんは書いてるわけですね。その中で彼はこういうことを言っている。マルクス主義的な発展段階論の洗礼を既に受けていた私は、経済地理という飯塚さんの専門領域に初めから一種の偏見を持っていた。大東亜とかグロース・ランドとかいう領域概念が氾濫していた時代的な雰囲気がある。そうした私の反発を

増幅させたことも確かである。こうして私の記憶する限り、東洋文化の研究という場で飯塚さんとはあまり親しく言葉を交じらす機会を持たないまま、私は1944年7月1日に一兵卒として召集され、朝鮮平壤、現在のピョンヤンの部隊に赴いてしまった、と書いてあります。

つまり、丸山真男という人は今申し上げたように実は空間の問題というよりは歴史、なにかずくやはりリニアな短径的な発展段階論というものが既に彼の頭の発想の中にあって、そういう点で、いわゆる支那と日本とのいわば前後関係というものが絶えず彼の発想の中にあつた。そういう点では典型的ないわゆる近代主義と言っていいと思います。

IV 歴史から空間へ—戦後の丸山の転換—

ところが、戦後になってそれが少しずつ変わってくるわけです。で、その問題を考えていくときに実は非常に面白いのは、このおそらくは丸山さんの最も著名な著作であり、最高傑作である『日本政治思想史研究』が何に対する対抗意識を持って書かれたかという点、この42年の高山岩男という人の、いわゆる近代の超克論を代表する『世界史の哲学』(岩波書店、1942年)ですね。これはまあ京都学派の中で最も著名な「世界史の哲学」を書いた人ですけれども。おそらくもう一方においては、和辻に対する対抗意識もあつたんだろうし。特に、高山岩男の『世界史の哲学』を実はこれ、岩波書店から1942年に出てるわけですが、その1節の中に「歴史の空間性と空間の歴史性」という非常に重要なチャプターがあるわけですね。

高山岩男がその中で、つまり世界史というものがヨーロッパ史ではないかたちで、むしろ複数の歴史へと分岐していくためにはどうしたらいいか。その世界史を複数の歴史として描くためのもうひとつの柱として日本というものを持つてくるわけですね。その日本というものを持つてくるためには、日本の持つている世界におけるある空間的な特殊性というものを打ち出して。そのために「空間の歴史性と歴史の空間性」という大きな章をたてて、そしてそれを媒介するものとして彼は身体性という問題をもう既にそのレベルで出しているわけです。

しかしこれはかなり僕から見ると後知恵的な非常に

ペダンティックな議論ですけども、しかし実はこの『近代の超克』論を出した彼らは既に、その歴史の空間性、空間の歴史性ということ既に語っていた。丸山さんはその空間という問題のたて方に対して常に違和感を持っていました。これはミシェル・フーコーが言う通り、空間を語る人間は反動的であり、歴史を語る人間は進歩的だ、ということ自分を常に突きつけられたというふうにあるエッセイの中で述べておりますけども、丸山さんも典型的にはマルクス・ボーイであつたということもあつて、明らかに空間よりは彼は歴史の問題を重要視していた。ところが戦争が終わって、やがて日本というのは植民地を全部引き剥がして、いわゆる明治期の国民国家の初期的な段階に領土的には戻つたわけですね。これはカイロ宣言を通じて、あるいはポツダム宣言を通じて日本はそこに収縮していきました。そこから初めて冒頭、僕が申し上げたような、明治のある時代に戻つたというように彼らは考えているわけです。

つまり、国民国家の純粹形態から帝国という国民国家を超えたある新しい空間を形成し、それが他律的に敗北によってもう1度初期的な国民国家に収縮したと。これが本来のオーセンティックな日本である、こういうふうには彼は考え、そして戦後の日本という言説空間をもう1回明治に戻していくという。これは間違いなく植民地的な空間というものはこれはある逸脱した、これは非常に過渡期の一時的な現象であつたというふうには彼は総括したと思うんですが。しかしその中で日本を考えていくときに、どうもやはり近代的な尺度の中で考えていく日本では日本の特殊性というものが理解できないのではないか、むしろやはり空間、つまり日本が空間的にどのような位置というものを占めているのか、あるいはこれはウォーラーシュタイン流に言うところだとゲオ・カルチャーというかジオ・カルチャーと言いましようか、ゲオ・クルトゥアールというか、地勢地政文化的なポジションというものについて、彼はやがて段々とそういう方向に日本の特殊性という問題を考えていくひとつの手がかりを持つていくわけですね。

これは、ある大学での講演、1984年ですが、80年代のちょうど半ば、「原型・古層・執拗低音」(1981年講演、『日本文化のかくれた形 同時代ライブラリー 84』岩波書店、1984年)という講演集の中で彼はこう言っているわけですね、政治学の領域でそういう要素、つまり

地理的な位置と風土を重く見たのはハウスホーファーという学者などが主張していたゲオポリティークですが、ゲオポリティークはナチスに利用されたため、その後ほとんど学会から消えてしまった。戦後ではカール・シュミット。これは言うまでもなくカール・シュミットという人の有名な『大地のノモス』（新田邦夫訳、福村出版、1976年）という本があるんです。彼も戦犯の1人ですが、そういう見地を理論に取り入れて孤軍奮闘している。

むしろゲオ・ポリティークやシュミットの『大地のノモス』のような立場を丸ごと容認するつもりは毛頭ありません。そこでことわりつつ、実は彼は日本の持っている地勢地政文化的な位置というものが日本という文化や日本の歴史意識の原型、彼は「歴史意識の古層」（『日本の思想6 歴史思想集』筑摩書房、1972年）という有名な論文の中では述べているわけですが。つまり日本に固有な彼が固有と考えている時間意識や歴史意識というものが、実は日本というものが置かれている地理的な位置あるいはそれによっていわば彩られた地勢地政文化によってどのようなバイアスや屈折を与えられてきたのか。そのことを彼はそこで論じているわけです。

これは間違いなく、おそらく60年代以降の高度成長期を通じて、彼が考えている永久革命としての近代化というものが、実はもっともつと矛盾を大きくしていく。むしろ近代化というのは、そう簡単にいわばポジティブなものではないのではないかという、あるひとつの懐疑というものがたぶん60年代の成長期を通じて彼の中に広がっていったのではないだろうか。そうすると彼が戦時期から持っていたこの歴史のあるリニアな発展というかたちでのメジャーではなくして、むしろそういうものを絶えず裏切るようなあるひとつの特殊性にバイアスというものを与えるもの、それが実は空間という問題ではないかというふうに彼はおそらく理解したのではないか。そう思うわけですね。そのことが既に、実は50年代からあるいは40年代の終わりぐらいから彼の中に現れていくわけです。

具体的に言うと、これは例えば福沢諭吉論の中でもそうですし、「近代日本思想史における国家理性の問題」（『展望』37、筑摩書房、1949年）あるいは「明治国家の思想」あるいは「開国」（『講座 現代倫理 11 転換期の倫理思想（日本）』筑摩書房、1959年）そして決定的に

は「歴史意識の古層」、こういうところの中に連綿として、この日本の持っている、あるいは日本に与えられた空間という問題が、もっと彼の分かり易い言葉を使うと、タテ軸に対するヨコ軸、あるいは歴史から空間へ、こういう方向へと彼の思想史の主要なトーンがシフトしていくわけですね。

実は、高山岩男が「歴史の空間性と空間の歴史性」を書いているある箇所の中でこういう比較をしております。日本とそしてポリネシアと朝鮮半島および中国を比較している文章が有名な箇所であるんですね。そして文明の移動説、文明が移動し、そこから新しいものがクリエイティブに形成される場所、それは一体どういう場所なんだろうか。それはまさしく日本という列島にある空間的なポジションにあるところに固有なかたちで歴史の新しい、文明をつくり出すひとつの場というものが見いだされる。それに対してメラネシアとかポリネシア、このような太平洋諸島、あるいは朝鮮半島のような半島、あるいは中国、大陸、それとは全く違うオリジナルなトポスとして日本というものを彼はそこの中で色々と哲学的に議論しているわけですね。

実は丸山さんが、ある「原型・古層・執拗低音」の中でも、これは僕は高山岩男を読んだのかどうか分からないんですが、ちょっと今日は文献持ってこなかったんで、詳しく文語は言うことができないんですが、全く同じ比較をしているわけです。つまり、なぜ朝鮮半島においては近代化というのは挫折したのか、あるいは太平洋諸島やあるいは島国において日本のような近代化というものができなかったのか。なぜ日本において、あるいは日本においてのみアジアにおいて近代化というのが発生し得たのか。その根拠というのは地勢地政文化的な比較、そこにあるんだという理解の仕方ですね。

これは、僕は読みながら、ああ、これは彼が最も批判した高山岩男ではないか。おそらく彼は、高山岩男もそうだと思うんですが、おそらく和辻をかなり彼は読み込んだんじゃないかな、と思うんですね。和辻の風土論は皆さんもご承知の通り、和辻の支那論を読めば彼が何を言いたいかということはある程度分かると思うんですが。どうも丸山さんはこの日本に特殊なものを記紀の神話の時代『古事記』と『日本書紀』に戻りながら「次々に成り行くイキホイ」というひとつの

日本のアルケー・ティプスを抽出し、それが古代から近現代にまでどのようなかたちでいわば執拗低音として日本の歴史意識の古層として鳴り響いてきたのか。それを「歴史意識の古層」の中で彼は見事に明らかにしてくれたんですが、それをつくり出した大きなひとつのファクターは日本というトポスの置かれたある空間的な位置、そこにあるんだというのが具体的な種明かしですね。

これはおそらく私は戦後の日本の中での日本特殊論や日本文化論あるいは日本人論とかなりオーバーラップするような言説ではなかったのかな、と。あるいは70年代に出た、例の『文明としてのイエ社会』（村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎著、中央公論社、1979年）もそうかもしれませんが、かなり日本というものを常に自明視し、そのトポスの持っている空間的な特殊性を歴史意識のいわばアルケー・ティプスと交錯させながら日本というものの持っているアジアとあるいは欧米とも比較したある特殊性というものを議論していく議論のたて方ですね。

V 丸山政治学のひとつの限界

結局そういう方向へと実は彼の戦後のいわゆる日本論というものは移行していったというかですね、それが私自身の作業仮説なんですね。そうすると一体、丸山真男の持っているクリティカルな批判というものを考えていく場合に、もちろん丸山さんは実はそうした日本の歴史意識の古層に現れているような特殊性と批判的に対決するというのが彼の基本的なモチベーションだったわけですが、実は対峙すべきその対象をつくり出す言説に自分自身も実は一方で加担していたのではないだろうか。あるいは彼にとって日本というのはひとつの自明の理として既に指定されていて、その民族やあるいはその地理的な表象や、あるいはそれをつくり出しているファンダメンタルな文化というものは、連綿としてある連続性を持っているという、実は僕に言わせるとかなり近代的に作られてきた言説、それを実は彼自身はもう1回無意識のうちに反復してたんじゃないかな、というふうに私自身は思っているわけですね。

丸山さんという人はなるほどそういう点においては最も近代的な知性人だったわけですけども、一方にお

いて日本というものを語る場合に、彼が無意識のうちにその空間へのシフトの中で帯びていたこのメタレベルの言説というものをもう1回、もう少し歴史的なコンテキストの中で批判的に再構成していく必要があるのではないか。そうしていかなければどうも丸山さんの考えている日本というものを巡る彼の言説というのが結局はある種、日本イデオロギーの中に回収されていくそのギリギリのところで、彼は最終的には彼の晩年の立場というものがあったんじゃないか、というふうに私自身は個人的には理解しているわけですね。

それで、丸山真男という人は実は戦時期において既にナチスのゲオ・ポリティークはよく読んでおりましたし、それから和辻の風土論やあるいは京都学派の歴史と空間を巡る言説も彼なりによく咀嚼しておりました。しかし戦時期における彼の基本的な問題関心はいかにして近代的なネーションをつくるかということに彼の問題関心がありましたし、その発想の裏側には遅れたアジアあるいは東洋停滞論、その中で比較的先進的な近代化の要素というものを自生的につくり出している日本。その日本が先駆けて、いわばモダナイズされたネーションというものを築くことを通じて、いわば中国とのある連携というものを深めていけないのではないかという構想があったわけですね。

しかし戦後それが断ち切られた中で、彼の中に今まで比較的自分とは縁遠かった空間の問題が実は日本を語る場合に、そこに色濃く現れてきてくることを私自身はそこから読み取ることができるわけです。こういう言説のあり方というのは実は明治国家の草創期から既にあるわけです。例えば、1890年の第1回帝国議会の山県有朋の議論のたて方はこれは利益線と主権線という、これはある種帝国日本へとつながっていく心象地理というものが政治的、あるいは国際政治の中で語られていく。これについても丸山さんは「近代日本思想史における国家理性の問題」で若干言及しているんですが、どうもやはり僕から言わせるとネーションというものの持っているアプリオリな先見性といってしまうか、そこを歴史的にコンテクスチュアライズしてもう1回批判的に再構成していく作業が止まっているわけですね。

例えば、こういう言い方を彼はしているわけです。そもそも日本人および日本の文化というものを可能にしたものは何か。それは我々の国が領域、民族、言語、

水稻生産様式およびそれと結びついた集落と祭祀の形態などにおいて、世界の文明国の中で比較すれば、全く例外的とも言えるほどホモジニアスな社会を形成しており、遅くとも後期古墳時代から千数百年にわたって引き続き保持してきたというあの重たい歴史的原理すら横たわっている。

これは「歴史意識の古層」の中で彼は述べていることなんですけども。つまり日本、日本人あるいは日本のエスニシティーというものが、かなり彼はメタレベルにおいて非常にソリッドなものとして前提されており、その日本というものを形づくる地理的なフロンティアという問題はほとんど見えてきていない。だから彼の中に沖縄、琉球の問題、北海道やあるいは日本の内部の中でヴァナキユラーなものが、ネーションが形成される過程の中でどのように再構成され、隠蔽されあるいは逆に抑圧されていったのか。こういうことがほとんど彼の中には見えてきていないわけですね。

実は私達が今、司馬遼太郎やあるいは丸山真男のアカデミックなネーションの語りという問題を考えていくときに、そこのところをもう1回歴史的に再構成しつつ、国民というものはその内側のあるいはギリギリのフロンティアにおいて異質なものをどのように回収し、それを変形させ、そして同化していったのか。あるいはその内側において本当にホモジニアスなものが形成される前に、いわば多様なものや共約不可能なものというものがネーションの中にどのように回収されていったのか。あるいはそれが外側に広がっていったときに異質なものとしての帝国はどのようなヘテロジニアスなものと出会い、それとどのようないわば文化接触というものを遂げてきたのか。それが帝国が終焉した後も日本の国内にたとえこの国土やあるいはその心象地理が日本というものに収縮されたにしても、それは例えば依然として歴史の記憶や色々なところにどんなかたちで生かされているのか。あるいは生きているのか。こういう問題が少なくとも丸山さんの学問的な研究の中では僕自身はほとんど読み取ることができない。

従って、そういう意味において丸山真男の政治学というのは典型的には国民主義の政治学ではないか。それが持っているポジティブな側面と、それが持っている限界というものを明確に私達というか私ははっきりと自覚しつつ、やはり国民主義というものが解体され

る中で、国民や国民主義を巡る言説がこれまで何を語ってこなかったのかということをもう1度歴史と空間の2つのレベルにおいて再発見していく作業というんでしょうか、そのことが実は国家とその国家の上位レベル、これはリージョナルなものといえればリージョナルなもの、国家のサブ的なカテゴリーとしてある、このローカルなものこういうものがグローバルな時代の中にどんなかたちで立ち上げてこられるのか、ということを考えていくひとつの歴史的な素材になるのではないか、というふうに私自身は感じているわけですね。

VI 丸山を越えて

最後にその問題関心を言うために、ちょっと結論じみたことを言うと、これは丸山さんのお弟子さんでしかし丸山さんとはちょっと違うんですが三谷太郎という政治史をやっている人がいるんですね。彼が近代日本の百年を総括しながら、要するに日本の近代百年というものは戦時体制と戦後体制があやなす歴史であった。日本の民主主義というものは根本的には戦後デモクラシーであった。つまり日清戦争後、日露戦争後、第1次世界大戦後、これは全て戦後デモクラシーである。最後の戦後デモクラシーとして私達が50年経って今の戦後民主主義というものを考えているわけですね。

しかし、この歴史は明らかに戦時体制の革命的な変化なくしてはあり得なかった。この戦時動員体制は30年代の最後の戦時期を彩った世界戦争の時代だったわけですけども。その拡がりはずっと植民地というものをついて日本の国家のフロンティアとして空間的な拡がりの中で絶えず包み込んでいた歴史でもあったわけですね。本来、戦後デモクラシーは同時にポストコロニアルという問題を突きつけた時代でもあったわけですけども、戦後初めての第4番目の戦後デモクラシーにおいて初めてポストコロニアルという問題が提起された。しかし50年間それは事実上凍結されて、これはおそらく私は冷戦という問題をもっと歴史と空間論的にやらなければならないと思うんですが、結局その50年間の凍結状態の中で冷戦が終わりそれが解氷されて、今やっと冷戦という時空間の中でネーションというものを語る場合のある私達が見落としたブラインド・ポイントというものが見えてきたと思うんです

が、そういう点から見ていくとこの丸山さんというものは、やはり冷戦が終わってその彼の限界というものが見えてきたということと決して私は不思議ではないと思います。

それは明らかにやはりネーションというものを中心として語られてきた時空間、こういう時代というものが終わろうとし、その中でグローバルなものローカルなものが激しくぶつかり合いながら交錯している。もうひとつその問題を考えていくときに私はリージョナルなものをひとつ考えたい。それは丸山さんが理解できなかったことではないか。なぜならば、三谷さんの言う通り、実は植民地というのは、これはある意味において暴力的な形態のリージョナリズムでもあったと。

このリージョナリズムが残念ながらこの帝国という形態と通じてしか立ち上げられなかったわけですが、今私達の時代の中でこのグローバル化とローカル化とそしてリージョナル化というこの3層構造が国民国家の時空間をはさんでせめぎあっている。そういう点で私はポストコロニアルという問題や帝国の問題、あるいはネーションの問題あるいはローカルな問題というのはどこかで複雑に結びつきながら私達の前に問題を提起されているのではないか。そういう問題を考えていくときに丸山真男のような言説を通じては、その問題はやはり捉えきれないのではないのではないかということをお自身の限界として申し上げて、今日の雑駁な話しにかえさせていただきたいと思います。

討論

水内（司会）：姜先生、大変刺激のお話をいただきありがとうございます。先生は、以前より、インプリットにもエクスプリットにも、空間と心象地理、地政学については語られてこられました。空間というテーマにひきつけて話題提供をされたのは初めてだそうです。地理学に身を置かせいか、そくそくするようなお話しでしたが、では質問など、フロアのほうからお願い申し上げます。

質問者：山口県立大学の山崎と申します。実は専門は政治地理でして、政治地理は先生のご指摘ありました

ように戦中の新学への加担で戦後、政治地理の中、特に地理学の中ではほとんど政治については語らないという状況が生まれました。これはヨーロッパ、アメリカでもそういう状況だったわけですが、特に日本の場合はその回復が非常に遅れて、本日も実は昨日まで地理学の政治地理の学会の例会に則した研究会をやったんですが、実際そのメンバーの中で私だけがこっちに來たんです。なぜ來たかと言いますと、それは姜先生がご講演されるということで。姜先生の内容に関しましては、実際僕は確か『思想』にサイドを引用された「心象地理」というのを書かれた時ありましたよね、あの頃から先生の地理的センスについては、僕も現在の地理学でこれだけのことを言う人はまずいないだろうなと思っています。先生のテレビ討論番組からずっと僕は注目してきたわけです。そういう意味で非常に刺激のお話をいただきまして、むしろ今の地理の水準でこれだけの、例えば、和辻の批判であるとか、丸山はともかくとして、飯塚浩二であるとか、そういう人々を地理学者の中が十分に批判的に言説を克服し得てないという現状に、半ば絶望的な思いもあるわけですが、今日は来てよかったなと思います。大変感謝しております。

質問が、そういう話しと関わらないかもしれませんが、2点ございまして、ひとつは最初の方にお話しされたところですが、より近代的な国民意識を文化としてではなく政治的決断として行うとおっしゃいましたが、この政治的決断というものをもう少しご説明いただきたいということがひとつです。

もう1点は、最後の方に言及されたことですが、丸山は確かにおっしゃる通り、戦前、東洋停滞論ですとか、近代的なネーションを作り上げるという意図の下にアジアの停滞性から脱却していく日本の姿を模索しようとしたということは分かるんですが、戦後にさらにその残像を持ち続けるといいますか、日本的なトポスとしての道を自明視して、そういう言説を戦後にも回復させていくという外的なモチベーションといえますか、戦前の単なる残像であったのか、それとも戦後の何らかの状況が丸山に引き続きそういう言説を継続させた何らかの要因があるのでしたら、先生お考えの範囲で教えていただきたい、という以上の2点です。

姜：ありがとうございます。まだ僕もよく、生煮え

でよく分からないんですが、まず2番目から言うとして、これは非常にパーソナルなレベルの話になるんですが、実は最近、韓国で『日本の思想』という本が翻訳されました。これは高麗大学のチェ・ジョンソップという有名な政治学者がいますが、彼が翻訳したやつに少し、ハンギョレ新聞でちょっと丸山真男に言及してまして、非常に一方では賞賛しつつ、もう一方では、僕は非常にそこで我が意を得たりというのは、丸山という人にとってこのアジアに関わる言説というものは非常に見えてこないというか、そのことをチェ先生は述べてらっしゃるんですね。僕も非常に彼の色々なエピソードや色々なものを読んでなかなかそれが見えてこないんです。

これは多分理論的な以前の問題にあるのではないだろうか。ご承知の通り、彼は字品で第2回目の、これは敗戦近く、字品である種の暗号解読をやっていたわけですね。そこで被爆をして広島市内に入り、彼は被爆手帳を支給されたんですが、のちにこれは断っているんですね。自分の歴史をずっといわゆる被爆者としての歴史を彼は語らないようにしてきたわけですけれども、それはそれとして、日清戦争の始まりで字品に大本営が置かれるわけです。いわゆる明治天皇がそこに軍服を着て初めて、比較的平和的な考え方を持っていた君主といわれていますけれども、日清戦争を通じて初めて彼は字品に大本営を移し、そこに天皇として軍服を着て。その字品に彼がいた。これは非常にシンボリックな話なんですけど、それ以上に彼に影響を与えたのはお父さんの丸山幹治だと思えます。

丸山幹治という人は、ご承知の通り丸山さんは大阪の生まれですから、大阪は朝日新聞との因縁が深く、丸山幹治という人は著名なジャーナリストでしたし、戦時期においては朝鮮半島においてジャーナリストとして活躍していました。そして丸山幹治とは例の池辺三山とも大きな関係がありましたし、何よりも長谷川如是閑と非常に親交があり、丸山さんは如是閑とは非常に深い関係を持っていました。そして彼は第1回目の出征の場所が平壤でここに3ヶ月おりました。

私は非常に不思議で仕方がないのは、彼のいろんなダイアリーやいろんなものを見る限りにおいて、その時の記録が全然無いんですね。そして、丸山幹治を通じてあの半島の状況についてはかなり詳しい情報を得ていたはずにもかかわらず、ほとんど何も語っていな

い。そこはかなりずっと不在になっているんですね。それが僕はひとつよく分からない。

それから、やっぱり彼の中にマルクス主義的な発展段階論というのはかなり1930年代に大きな影響を与えたのではないかなと思います。現に彼はウィットフォーゲルのようなオリエンタル・ディスポニズムを書いた彼の影響に染まっておりましたし、後にウィットフォーゲルはハーバート・ノーマンをマッカーシズムで槍玉にあげたときにはそこから初めてウィットフォーゲルを批判してオリエンタル・ディスポニズム批判というのを若干やるようにはなるんですが、いずれにせよ彼にはパーソナルなレベル、あるいは理論のレベルにおいても、ある種やはりそういうものが何か身体化されたものの中に理論的な言説としても、かなり彼は深くその影響を受けていたのではないかな、というふうには僕自身は忖度しているわけですね。これは、僕自身はまだやってないんですが、ジャーナリストの、あるいは文学者の中国や朝鮮との関わり合いをもう少し今後やっていかなければならないと思いますけども。

僕なんかは例えば、岩波文庫で今出ている如是閑の『倫敦！ 倫敦？』というのがありますね。あれを読むと最後のところに、まあこれは支那の状況については、本当にこれはやっぱりオリエンタリストとしか言いようのない言説がふんだんに出てますよね。あの如是閑においてすら。あるいは夏目漱石がロンドンに行く前に西南アジアに立ち寄ったときで、向こうのおみやげ物を買ってボラれて、それで非常に怒り心頭に達して、その時に言う台詞が日記の中に書いてあるわけですけども、亡国の民は卑しき民なり、と書いてあるんですね。つまり植民地化されて亡国になったやつはこんなにメンタルな部分まで卑しいんだ、というふうには一方では書いている。もう一方では、そういう漱石がヨーロッパにおいては、自分が小人のように扱われて、非常に惨めな状態になる自分というものをよく彼は理解している。そういうような複雑なものというのは、やっぱり丸山さんの中にもあったんじゃないかなと思うんですよ。

僕自身。それはね、非常に面白いんですが、こんなことを言うと彼を何か貶すようでというよりは、非常にエピソードで、先ほど申し上げた飯塚さんと初めて会ったときに、丸山さんはあるところこう書いているんですね。こんなにハリウッドの映画に出てくるよ

うなハンサムな人であったのは初めてだ、と。自分はただただ茫然然として彼の横顔を見ていた、と書いてありますね。その後が非常にあれなんです。よく自分は父親の幹治から、真男は男に生まれてよかったな、と言われていた。小さい時から、自分は不男であるということが非常にコンプレックスになっていたと書いてあるんですね。その対象は 20 年代以降のやっぱりアメリカ・ハリウッド映画のハンサムの典型に表したようなモダンボーイとしての飯塚浩二と自分との比較をそこに書いてあるんですね。これはなにも非常にくだらないエピソードだといえばエピソードなんですけども。

例えば漱石なんかがロンドンに出かけて行って、自分より背の低い奴がいなかな、いなかな、と探したらやっついた。それは自分が映っている鏡、鏡に映っている自分の姿だった、っていう有名な話があるんですね。何かそういうようなものというのと、彼が実際に見た朝鮮半島というのは一体どうであったのか、これは僕が日清戦争で出かけていった兵士達の手紙とかいろいろ読むと、ようするに衛生状態が悪い、一言でいうと聞きしにまさるほど汚いというイメージなんです。これは如是閑も『倫敦！倫敦？』の中に書いてありますけれども。漱石も『満韓とこゝろへ』の中にむこうに行って、開口一番に、汚い。これは非常に身体感覚としてはっきりとほとんどの人がそう言っているわけですね。あるいは僕が冒頭でちょっと書いた 1925 年の労働争議を書いた横光利一の『上海』にも。要するに汚いというイメージが上海という租界地の中によくあらわれているものですから。そういうものというのがやっぱりある身体感覚としてあって、そういうものを理論的にはかなり説明してくれるある種の短径的な発展段階論、あるいはアジア論というのがやっぱり 30 年代にあったんじゃないだろうかと。これは特にマルクス主義の場合に強かったんじゃないかというふうに、私自身はそう思っています。

そういうものが、やはり戦後も彼の中にはかたちを変えてやっぱり続いていたんじゃないかなというふうに、僕自身は思うわけですね。それが大体後に、地政地勢文化論的な日本とアジアの比較の中によく現れています。サイドが言う通り、オリエンタリズムとは比較研究である、というのはまさしくその通りで、大塚さんの比較経済史学もそうですし、丸山さんの比較

政治文化論的な発想もそうだと思うんですが、やっぱりそこにはかたちを変えて比較というかたちで現れてきているんじゃないかな、というふうに、私自身は思っているんですね。だからそういう点で、戦前と戦後の中に言説や思想として一体、何が違って、何が変わらなかったのか。そのことをもう少し検証してみる必要があるんじゃないかなと。そういうふうにしか僕自身は答えられないんですが。

それから第 1 番目のこの決断主義という問題。これは非常に分かりにくいと思うんですが。例えば、30 年代から 40 年代の三木清のいろいろなエッセイや言論を見てみますと、これはまるっきり丸山さんと同じようなことを言っていて。例えば、満州に行って、五族協和、これは建て前としては五族が協和するというわけですから、現在の EU と同じなわけですよ。建て前としては。でも、9 割以上がこれは中国人だったわけですけども。この中で日本人がとにかく威張ってエバッテた。そして日本の文化というものが優れているというのをかさに着たり、あるいは日本の地域的なローカル性を丸出しにして、その人間達が寄り合い所帯のように集まって割拠している。これでは五族協和が出来ないではないか。もっとやはり国民というのは、ネイションというのは近代的なものでなければならぬ。

これは 2 人の中に共通した考え方で、おそらくこれはフランス革命以来のネイションというのが人種やエスニシティや文化的な背景とは違う、自分がフランス国民になるというひとつの決断を通じてネイションというのは形成される。その限りにおいて、いわゆるドイツ型のナチオンとは違うんだ、という。これはまあいわゆるジャコバン主義的なナショナリティのラインだと思うんですね。丸山さんの中に一貫してそういう啓蒙主義的というか、あるいはジャコバンのナショナリティというのがあって、そうでなければ、人種や民族や文化的な背景が違う共同体がどうやってあるコーポレーションというものをかたち作ることが出来るのか。これは間違いなく東亜が連盟して、アジアの列強帝国主義にあたるという考え方だったと思いますね。基本的には。

これは例えば、丸山さんの先生筋にある矢部貞治という人の『矢部日記』を読むとですね、12 月 8 日、矢部貞治というふうに書いてあるかという、パー

ル・バーバーの攻撃を聞いて、バンザーイ、と書いてありますね。バンザーイ、と書いてあるんです。歓喜せんばかりに喜んだ、というふうに書いてあるんです。これはおそらく矢部さんだけじゃなくて、ほとんどあの時の帝国大学にいた人々の共通した印象だったんじゃないかなと思うんです。丸山さんも決して無縁ではなかったと思うんですが。

やっぱりその限りでは、そういう文化や民族やあるいはそういうローカルな差異というものを乗り越えていく原理としてやはり政治という空間があり、その政治の空間というものはそういうかたちで決断の場として設計されていた。だから丸山さんにとってネーションというのは文化であれ、言語であれ、そういうものによっては語り得ない。むしろ彼は記憶の共同体とか、あるいは想像の共同体としてネーションというのを理解していますね。

なるほどそれを支えるエスニックなものとして日本人というエスニーが存在するにしても、ただそれは依然としてまだ文化的なネーションであって、政治的な意味での近代的なネーションになるためには、そこにデモクラシーとナショナリズムという問題が解決されなければ。そういう意味で彼は政治的な決断主義という問題と、デモクラシーそしてネーションというこの三位一体の中で、いわば日本という国民国家のある再生というか、これを図ろうとするわけですね。そういう再生のされた国民としての日本とですね、いわば個々に割拠分裂したナショナリズムを立ち上げられない支那とが日本の影響の下で、いわば孫文的な国民主義を立ち上げ、そしてその両者がいわば対等な立場で東亜の新秩序というものを形成していく。ある種のリージョナリズムだと思うんですが。実際に 40 年代前後に彼はさかんに孫文について言及しているわけです。

だからそういう意味で彼の言う決断主義的な国民概念というのは、今、申し上げたような政治というのが文化や民族や言語の違いを超えてあるひとつ共通の空間として現れ、その場で個々に主体性においてネーションになるということを皆がデモクラティックな原理を通じて、それこそ国民投票じゃないですけども、決断する。そこに新しいレジームとそれを代表する政治政府というのが出来上がる。これが彼にとっては近衛新体制だったと思うんですが、そういうことです。

山崎：ありがとうございます。だいたい分かったんですが、ひとつだけ今のお答えを聞いてから申し上げようと思ったんですが、つまり政治的共同体としての決断ということと、丸山を戦後に引きずったトボスとしての日本ということが同じ人間が言うこととしてはやっぱり矛盾があつてですね、僕は姜先生の話を聞くと元気が出るんですが、丸山がこうだった、ということを知ると、逆にちょっと元気が無くなるんですね。そのあたりが一体日本人のこれだけの知識人ですが、それだけのデモクラシーやあるいは政治的共同体の立ち上げを言っておきながら、その限界をパーソナルな部分では克服できてなかった、というこのあたりに非常に今後の社会の難しい問題を含んでいるんじゃないかなという気がしたんですが。コメントですけど、ありがとうございます。

姜：それは僕もそう思いますね。やっぱり矛盾がかなりあると思いますね。それはやっぱり僕は帝国が崩壊したということが大きかったんじゃないでしょうかね。例えば 37 年だったでしょうかね、日本の国民学校でいわれている地理の教科書を読むと、大日本帝国は日本列島と朝鮮半島よりなる、その人口の 7 割は日本人であり、3 割は海外の植民地の人間である、と。だからあの時の国民学校に通っていた子供達は、日本という国家はこの列島と半島よりその主要なコアは成り立っているというのは、みんな大前提になっているわけで。やっぱりそれが崩壊した後のあり方というものを考えていくときに、かなり丸山さんの国民についての語りというんでしょうかね、これはベネディクト・アンダーソンがいうとおり国民のびっちり引き締まった皮膚を帝国というかたちで外側に引き伸ばしていけば、必ずそれは異質なものと出会い、その皮膚が破れるかもしれないわけで。だから帝国というのは純粋なホモジーニアスな国民というものが絶えず、場合によっては裏切られたり、ハイブリッドなものになっていく可能性を秘めているわけですね。その問題が帝国が崩壊したことによってもう 1 回びっちり引き締まった皮膚にももの見事に回収されていく。その回収しきれない部分が沖縄とかサハリンとか、あるいはポストコロナルな問題としてあるとは思いますが。

質問者：東京大学の花田です。戦後、戦前は丸山さん

は「空間の歴史性」とか「歴史の空間性」とかいう評を持っている論に対するひとつの対抗意識を持っていた。その場合には「歴史」という軸に丸山さんが依っていた。しかし戦後になって、歴史から空間へとシフトした、とおっしゃったわけですね。確かに思想や志向の点でも彼のデビュー論文の「超国家主義の論理と心理」の中の分析の仕方の中で空間の配置をひとつのメタファーにした分析は、戦後の分析で行われている。あれが敗戦になってすぐ広島近郊にいた頃に草稿を書いたらしいんですが、そこにおいても空間ということに着目して、そのことを私も思い起こすんですけども。では一体なぜ彼は帝国、自らが住んでいた国が帝国の時代には、歴史に軸を置き、帝国が崩壊した後に空間へとシフトを行ったのか。そのあたりについてどのような説明が可能なのか。

姜：難しいですね。僕もよくそれが分からなくてですね。ただ、『日本政治思想史研究』を書いた時点から英語版『日本政治思想史研究』(*Studies in the Intellectual History of Tokugawa Japan*, M. Hane (tr.), Tokyo-Princeton, 1974)のあとがきとですね、日本語版のあとがきがあるんで。彼は『日本政治思想史研究』を書き上げた時点で、どうもやっぱり自分が近代的な思惟が朱子学という日本の体制の学問の中でどのように、いわば正統イデオロギーの解体過程の中から析出されてきたのか。それをたどっていく中で、どうも書き終わって、何か彼が足りないというように考えたみたいですね。それはたぶんはつきりと彼は空間とは言っていないけども、どうも戦後自分が50年代から考えるようになった発想は、既に『日本政治思想史研究』の1944年の最後の論文を書いた時点から、どうも彼の中に醸成されていたんではないかと思えますね。

ただそれを明確に彼は空間というかたち、あるいは「開国」というこのタテ軸に対するヨコ軸、あるいは彼の言い方を言えば文化接触という問題では、まだはつきりと明示化していないと思うんです。ただそれを書き上げた後に、どうもやはりこれは近代的な意識というものが、日本においては欠如しているのではなくして、日本の中にも実は地下水のように流れていた。だから日本には近代化へと向かう内発的なものが欠如していたのではなくして、内発的なかたちでは実は体制イデオロギーの中にひとつの思惟の範疇としてはあ

ったんだということを、そこで何度くり返し議論しているわけですけども。

ご承知の通り『日本政治思想史研究』は第1論文の最初はヘーゲルから始まっているわけですね。ヘーゲルの言い方を使うと、あれは間違いなくヘーゲル『歴史哲学』で、ご承知の通り、ヘーゲルはあの『歴史哲学』の中で、支那というのは持続の帝国である、変化がない。これは間違いなく比較を彼は考えているわけですね。比較を考えているのですが『日本政治思想史研究』の中では、それは比較研究をまだ体系的にやってみせません。ましてや朝鮮朱子学は全くあの中で取り上げられていません。

僕はどうも、丸山さんはこの徂徠学から国学の宣長にいく、あるいは伊藤仁斎なんかについて述べていく。それと中国における体制イデオロギーとしての儒教とは一体どう違ってたんだろう。あるいは朝鮮のイ・テギユを初めとする朱子学とどう違うのか。それが幕藩体制のオーソドクシーの中でどのように体制そのものを内側から蚕食していくようなあるイデオロギーを生み出していったのか。それはどうも、空間的な比較の問題にせざるを得なかったというふうに、彼はどこかで考えてたんじゃないかと思うんですけども。あるいは書き上げて。その中で、なぜ日本だけ、なるほどイデアル・タイプとしてのネイションからすればかなりいびつではあるけども、しかし支那や朝鮮とは違うある国民共同体というものをなぜ日本は立ち上げることが出来たのかということ。それとやっぱりその問題を考えていくと、どうも僕はやっぱり比較にならざるを得なかったんじゃないかな、それが問題意識としてもあったんじゃないかと思うんです。それがベースにあって戦後ご案内の通り『日本』というのを書いた『日本』というメディアの中で活躍した陸羯南を丸山さんは書いているんですけども、その中で、やっと日本はオーセンティックな日本に、日本列島4島に戻った。彼はそこに書いてますけども。どうもそこからやはり依然としてある日本のモダンティにおけるひとつのアジア的なレベルから見た独自性とは何か、ということを決えず考えていたんじゃないかと思えますね。

それが例えば、これは花田先生のご専門になるけども、ドイツのゲーリングと日本の戦犯を比較したところがありますよね。あれを僕は読んで、これはどうかなと思うんですが、要するにナチスの場合は自由と

意識をくぐり抜けたファシストとしての自覚がある。日本には責任を担う自由意識すら無いじゃないかと、だから日本の戦犯は泣き叫び、ゲーリングは絞首する、という有名な表現がありますね。だからナチスがユダヤ人を虐殺したのも、これは実はユダヤ人をモノのように見立てて、ザッヘ Sache のように見立てて、それは近代的な個人意識をくぐり抜けたかたちで下から出てきたファシズムであって、日本の場合にはそういうものすら無かったというふうに彼は比較しているわけですけれども。その点では、アジア的な特殊性が、ヨーロッパあるいは近代的な思惟の理念型の鏡に照らし出されてよりクリアーに出ているんですけれども、もう一方ではやはり日本が東アジアの中で占めている独自性というのか、それはどうも一貫して彼あったんじゃないかと思いますね。僕はそういうふうに理解しています。

花田：そうすると戦後の方が、日本は帝国が解体されて縮小し純粋化したから空間として取り扱いやすくなった。

姜：僕はそう思いますね。それはね、なにも丸山さんだけじゃないと思います。例えば、ちょっと僕がやった限りでいうと矢内原忠雄もそうだし、それから以前にも書いた南原繁もそうだし。やっぱりこの日本列島という心象地理というんでしょうかね、ネイション。これはかなりインプリントされてたんじゃないでしょうかね。だからカイロ宣言でいう北緯何度でしたっけね、あれ以降は日本の領土とは見なさないというときに、これは言うまでもなく、沖縄は入っていなかったわけですね。それについては全然日本の本来の固有の領土としては切り離してもいいと。サハリンも多分そうだと思うんですが。ですからそれはかなり国民的なコンセンサスとしてあったような気がします。

だから、戦前は実は日本文化論のようなものが比較研究として隆盛を極めたというのは戦後ほどじゃないんじゃないでしょうかね。どうでしょうかね。これ程までにメディアが分化して、いわゆる日本人論、日本文化論というものが隆盛を極めるというのは、むしろ戦後の現象ではないでしょうかね。なるほど志賀重昂とか、陸羯南とか、いろいろいますね。日本主義のイデオログというのがあるわけですけど。それは

戦後のような、ああいうかなりエスノセントリックな文化ナショナリズムとはひと味違うものだったんじゃないかなというふうに僕自身は思うんですが。ですから今、花田さんがおっしゃったように、かなり純粋形態へと復帰したという、日本の心象地理とその文化の持っている純粋性というんでしょうか。それがやはり日本というものを他のものと比較していく、それをより活発にしたということがあるのかもかもしれません。

質問者：九州大学の遠城といいます。ひとつだけお聞きしたいんですけども、福沢諭吉のなかに「交通」という概念が出てきて、福沢諭吉の中で大きな意味を持ったんだなというふうに理解しているんですが、むしろネイションを超えていくような中で、世界的な流れとして捉えられている。丸山の場合は、「交通」という前提がないところでネイションの議論がなされているように思われますが、ここについてはどういうふうに考えておられますか。

姜：それは確か、吉見さんどっかで書いてたかな民情一新について、福沢の。

吉見：あ、部分的には。

姜：部分的にね。福沢諭吉の民情一新論、あそこの中を読むとやっぱりコミュニケーションですね、一言で言えば。交通、コミュニケーション、通信、それから郵便制度。これが実は文明の、シビリゼーションの力であるというか。それははっきりと彼は見抜いているわけですね。

福沢は間違いなく 1870 年代でだいたい近代地理学が国家と結びついてくるのは普仏戦争以後ぐらいでしょう、だいたい。70 年代から 80 年代にかけてですね。あの時のやはりコミュニケーションの手段というのは、福沢にとって文明というのは要するに社会のコミュニケーションが多様化し、そして個人がそのコミュニケーションを通じて多様な価値観をお互いに交換し合う。それは権力は偏狭せずに、多様な分野においていろいろな諸価値とその力というものが相殺し合い、よりブルーラルな社会になっていく。それが彼にとって文明の前進なわけですね。これは丸山さんの言い方を使うと人間交際論ということだと思うんですが。

実際に福沢もそういうことを言っておりますし、丸山さんもそういうことを言っております。

で、それは丸山さんの言い方を使えば、やはり明六社にあるような自発的なアソシエーションを通じて、コミュニケーション手段をより多様化させながら、社会がブルーラルな価値、これを共有し合うような、そういう社会なんです。しかし、やはりこれは国体とはナショナリティなり、とはっきりと福沢が言ってる通り、文明というものと国体というものとは、やはりこれはセットになってるわけですよ、基本的には。究極的には文明というのは国体を超えていくにしても、少なくともコンディショナルにはそうである。丸山さんも基本的には近代というのは国民というひとつの重要な政治的共同体を形成し、その中でやはり人々の社会的な人間交際というものを多様化し、コミュニケーション手段というものをより拡げていく。ですから丸山さんにとって、社会がより多様化するブルーラルな社会になるということと、それが対外的に国民国家として大きな力を持つということは、決してこれは矛盾しないわけですよ。

言い換えれば、例えば、ボックス・ブリタニカもボックス・アメリカナも考えていけば、外に対しては強い国家であっても、国内的には弱い社会、弱い国家であり得るわけですよ。そこにはやっぱり国家という問題がしかもそれは国民が国家に一体化したこの万国公法に基づく共同体というものが、やっぱり重要な柱になってるわけです。そのことをよく表しているのが「近代日本思想史における国家理性の問題」、いわゆるシュタット・レーゾンの問題ですね。

僕は、社会が、つまりソサイエティというものがよりブルーラルな社会になっていくということと、その社会が国民国家というある政治的な形態をとって、あるひとつの国際社会の空間の中により強い国家として現れてくるということは矛盾しないというよりは、むしろ社会において文明がより進化すればするほど実は国力が増大してくという考え方が、やっぱり福沢の中にありましたし、丸山さんの中にもそれはあったと思うんです。

これはフーコーが言うとおり、シュタット・レーゾンというのを支えていく国内のポリスというんでしょうか。いわゆる労働から生殖から教育から、ありとあらゆる領域のバイオ・パワーというものをより活用さ

せていくことを通じて、ひとつの国家というものがより強い国家に成り得るといえるか。これはやはり、近代国家の中での国家理性という考え方を支えていたひとつの大きな前提だったんじゃないかなと思うんですけどね。

やはり私達は今のところ近代社会の中で国家によって総括されない社会は、まだ形成されていないわけですよ、基本的には。まだ依然として。たとえば国民国家というものが相対化され、非常に脆弱なものになりつつあるとはいえ、依然として私達は国家というものを通じて立ち上げられてくるものに、依然として寄り掛かっている部分があるわけですよ。その問題が、やはり福沢も社会の多様化とコミュニケーション手段のより複合的なあり方という問題と国家理性という問題とが、コインの表と裏あるいは相互補完関係にあるという。

これは例えば、大正デモクラシー期を見ればよく分かると思います。国内においてあれ程まである種のモダニズムが活発になった 1920 年代は実は朝鮮半島でいうと最も過酷な社会、時代でもありました。それは国内という内側から見るとかなりアメリカニズムが進行し、政治的にもかなりデモクラティックなものが非常に社会的に進んだ時代なわけですけども。これが国境の外側に向かって行った時には、これは最も過酷な植民地支配が行われたのが 20 年代でもあるわけですよ。

そのアポリアというのはどうも僕はやっぱりそれだけでは解けないというか、やっぱりその社会のひとつの多様な、丸山さんが言う結社的な多様性と自発性というものを深めていくことを通じて、それが国家というあるひとつの共同性を超えられるというふうには丸山さんはやっぱり今のところ、少なくともその可能性は将来の世界にはあるにしても、やっぱりそれは彼らには考えられなかったというか。それは『『文明論之概略』を読む』(岩波新書、1986 年)の中に彼はそう書いてありますね。

今の現段階においては、やっぱりそれは不可能ではないか。僕はむしろ、ネイションというひとつのホモジーニアスなあるグライッヒ・シャルトゥングというか、画一化が進んでいった中で、フロンティアとこの日本列島の内側にあるネイションに共約できないいわゆる不純なものやいびつなものがどういうかたちで歴

史的に処理され、それが抑圧されたり、隠蔽されたりして国民の歴史が語られてきたか、それをもう1回歴史的に再構成、追体験しつつ、発見していく。それが出来て初めて実は外側にあった植民地というものをその延長上に見えてくるんじゃないかなと思うんですよね。そのことの中から、実は国民というもののひとつのボーダーでは見えてこれないものというのが見えてくるというか。それを経ないと、やっぱりこの国民主義という問題の持っているものが来るといふ表現はおかしいですけども、なかなか出来ないんじゃないかなというふうに、僕自身はそう思います。答えになっていないかもしれませんが。

水内：活発なご議論をいただき本当にありがとうございました。地理学に身を置くものとして、姜さんのようなご研究やアプローチが共通通貨として共有されるような地理学の発展も夢見ております。今後ともよろしくお願い申し上げます。またこのような機会をつくっていただいた、納富さんや溝口さんをはじめとする九州大学のみなさまに厚くお礼申し上げます。

追記：なおこの講演を企画していただきたい九州大学の空間プロジェクトの成果は、納富信留・溝口孝司編『空間へのパースペクティヴー九州大学「空間」プロジェクト』九州大学出版会、1999年に収められているのであわせてご覧いただきたい。